## 第 5 回教育哲学会奨励賞　選考結果および授賞理由

選考結果

第 5 回の教育哲学会奨励賞は、『教育哲学研究』第 116 号、117 号に掲載された論文を対象として理事会において選考を行い、奨励賞にふさわしい論文として、田中智輝会員の「「世界」の継承と更新に向けた「過去への態度」――H. アレントによる近代教育批判の時間的次元に着目して――」（『教育哲学研究』第 116 号所収）を受賞作として選定した。

授賞理由

田中論文は、「単一の物語を紐帯とするのではない仕方で、教育はいかにして過去の出来事や記憶の継承を可能にし、世代をこえた共同性を担保することができるのか」という現代的な難問に、H. アレントの教育論とその背後にある時間性の構造に着目することで解決の糸口を見出そうとした論考である。子どもの「新しさ」を保持するためにこそ教育は過去との関係を重視すべきだ、とするアレントの主張が高く評価されてきたが、過去との関係と「世界」の継承・更新がいかに関わるのか、という根本的な問いが十分に検討されてこなかった。こうした先行研究の問題点の克服をめざして、田中論文はアレントの時間意識に焦点を絞って考察を進める。アレントは、「伝統の喪失」という現実を「新しいものへのパトス」によって否認しうるかのように考える進歩主義教育を批判し、過去との新たな関係を構築しようとした。アレントのこの試みは、過去から未来へと連続的に進行する時間ではなく、過去と未来の「衝突」によって現在の思考の流れが構成されると見るような、独自の時間性の構造を前提としている。そこに現れるのは、不動の「伝統」でも、「進歩という物語」でも、確定された「歴史」でもなく、未来に向けて救い出されることを待っているような、未確定の、未だ語られていない「過去」なのである。こうした「過去と未来の裂け目こそが教育の場所」となる。アレントは「教育」を、過去の新たな相貌を露わにすることによって世界の継承・更新を可能にする、そうした場として構想していたと考えられるのである。

このように、田中論文は、先行研究についての周到な検討に基づいて従来のアレント研究の欠を補うのみならず、アレントの思想そのものが含み持つ教育学的含意を、彼女の教育論の背後から取り出すことに成功している。独自の時間性の構造によって可能となる教育の姿が描ききれていないという点で物足りなさが残るものの、一人の思想家の思想が持つ教育学的アクチュアリティを堅実なテクスト読解によって取り出した点で高く評価できるものであり、今後の教育哲学研究の一つの指針となることが期待できる。

以上から，理事会では田中智輝会員の論文「「世界」の継承と更新に向けた「過去への態度」――H. アレントによる近代教育批判の時間的次元に着目して――」を第 5 回教育哲学会奨励賞にふさわしい論文として選定した。